

■聖武天皇(首皇子) 自らの権威の源泉を仏教に求め、〈藤原四卿没〉を機に、橘諸兄を用い、“天平文化”を現出させた。

しょうむてんのう

大宝律令・・・701＝ 生。文武天皇の第1皇子。首皇子。母は藤原不比等の女宮子。

持統天皇没・・・702＝ 1歳：

翌靈龜元年9月2日（715年10月3日）に〔注釈 1〕。24歳のときに元正天皇より皇位を譲られて即位することになる。

元明天皇即位 707＝ 6歳： 文武天皇が夭折、幼年であり、母宮子も心的障害に陥ったため、祖母の元明が“中継ぎ”として即位、

平城京遷都・・・710＝ 9歳：

日本書紀始・・・714＝13歳： 立太子。病弱であったこと、皇親勢力と外戚の藤原氏との対立もあって、即位は先延ばしにされ、

元正天皇即位 715＝14歳： 伯母(文武天皇の姉)が、“中継ぎの中継ぎ”として、として即位する。

・・・・・・・ 719＝18歳： はじめて政務にたずさわる。

藤原不比等没 720＝19歳：

聖武天皇即位 724＝23歳： *元正天皇の譲位により即位。長屋王を左大臣に任命、渡来人に賜姓をするなど、早速独自の政策を展開。
初めて、民間人を母とした天皇であることから、その正統性を、唐の則天武后に倣って、仏教から得ること、具体的には、菩薩戒を受けること、則天武后に授戒した道岸の弟子鑑真を招こうと、

渤海交流始・・・727＝26歳： 皇子が誕生、皇太子とするが、

渤海交流始・・・728＝27歳： 薨去。

長屋王の変・・・729＝28歳： 不比等の4子たちは、場合によっては即位も可能な皇后の伝統的地位に目をつけ、夫人安宿媛を皇后にしよう、これに強硬に反対すると予想される長屋王を陰謀によって葬り、光明立后を強行。以後、藤原氏の力が強大になり、貴族の官僚化が進む。

風土記完了・・・733＝32歳： 31年ぶりに遣唐使を派遣、僧栄叡、普照に鑑真招聘を託す。

藤原四卿没・・・737＝36歳： 疫病の流行により藤原4兄弟が相次いで没し、藤原氏の力が衰退。

橘諸兄右大臣 738＝37歳： *早速、阿倍内親王を立太子、橘諸兄を右大臣に据え、自らの力を発揮する体制を整える。天皇の母の宮子は長く病にふしていたが、唐より帰国した玄昉が看病してこれを回復させ、天皇は初めて母に直面することができた。以来、天皇は玄昉や吉備真備をますます重用、

藤原広嗣の乱 740＝39歳： これらに対する不満をきっかけに、藤原広嗣が九州において大規模な反乱をおこしたため、東国へ行幸し、以後6年間、都は恭仁京、紫香楽宮、難波京の間を移動。

国分寺建立詔 741＝40歳： 自らの受戒の機会を待つ間も、仏教による、世の中の平穏を願い、国分二寺の造営の詔、

大仏造立の詔 743＝42歳： 東大寺大仏として結実する 盧舎那仏の造願の詔を発する。

行基初大僧正 745＝44歳： 都を平城京に戻し、以後定着。

・・・・・・・ 746＝45歳： 遣唐使を派遣を決定したが、中止となる。

大仏鑄造始・・・747＝46歳： 大仏の鑄造が始まる。

孝謙天皇・・・ 749＝48歳： 皇后と共に行基を請じて受戒、出家して勝満と称し、皇太子阿倍内親王に譲位した(孝謙天皇)。光明皇太后のために、従来の皇后官職を発展させた紫微中台が設置され、藤原仲麻呂がその長官となった。両者はこの役所を拠点に勢力を拡大して行き、聖武の存在はしだいに軽くなって行く。

大仏開眼・・・ 752＝51歳： *大仏の開眼供養を行う。遣唐使藤原清河が派遣され、鑑真を正式に招聘、

・・・・・・・ 753＝52歳： 唐の目を怖れて拒否した清河に代わり、副使大伴古麻呂の船によって、鑑真は、ようやく薩摩に渡来、

鑑真来日・・・ 754＝53歳： 招聘を志して30年、僧を派遣して20年、鑑真が来日を企図して10余年、ようやく入京した鑑真を師とし、光明皇太后、孝謙天皇の3人で、大仏の前で、菩薩戒を受け、東大寺内に戒壇院をつくらせて、

・・・・・・・ 755＝54歳：

聖武天皇没・・・ 756＝55歳： 没した。

まもなく、孝謙上皇の命で、神武以来の歴代天皇の漢風諡号を一括撰進した淡海三船により、聖徳太子を尊崇し、自らを天武天皇の再来と認識していたことから、聖武天皇と諡号された。